「生きる」

大川小学校　津波裁判を闘った人たち

「裁判なんてしたくなかった」
これは原告となった遺族の声です。

なぜ遺族は裁判に踏み切らざるを得なかったのか
画期的と言われる仙台高裁判決を社会はどう生かしていくのか
こうした思いから（株）パオネットワークではドキュメンタリー映画
「生きる」－大川小学校津波裁判を闘った人たち－を制作しました。

このドキュメンタリー映画は、遺族が撮影してきた映像記録を元に描いています。
そして「生きる」というタイトルは、私たちが撮影していく中で、今の遺族の姿から
浮かび上がってきた言葉です。

ぜひご覧ください。

監督　寺田 和弘

協力　大川小学校児童津波被災遺族原告団 吉岡和弘 齋藤雅弘
主題歌 「駆けて来てよ」　歌 廣瀬奏（所属 ＳＣＳミュージカル研究所）
監督 寺田和弘　撮影 藤田和也・山口正芳　プロデューサー 松本裕子
2022年 日本 124分　製作パオネットワーク
助成　文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業）
文化庁

下校後で地域のあちこちに散らばっていたのに、「津波てんでんこ」の言い伝え通りに子どもたちは逃げのび、「釜石の奇跡」とまで呼ばれた小学校が存在する。一方で、「先生の言うことを聞いていたのに」74名もの児童が犠牲になった大川小学校。そこでは一体、何があったのか。わが子への愛に裏打ちされた、真実を求める遺族の情念により、教育現場の虚構（フィクション）は一枚一枚剝がされ、真相が露わになっていく。
「学校が子どもの命の最後の場所になってはならない」と断罪する裁判官の言葉は、全国で未だいじめや体罰から子どもたちの命を守り切れない学校、社会全体、私たち一人ひとりに鋭く向けられている。その言葉の何と重いことか。全国民必見のドキュメンタリーである。

尾木　直樹 （教育評論家・法政大学名誉教授）

堤 幸彦（映画監督）

色々、書こうと思いましたが、
どんな言葉もお子様を失った人々の無念を思うと文字になりません。

それでもあえて作品について語るならば、
向き合うべき映画がここにある、ということです。

登場する人々の言葉に集中し、悲しみ怒りながらも、自らの時代の不条理との関わり方を強く考えさせられる、そんな力を持った作品だと感じました。

コロナで中断していた気仙沼との交流も再開しようと決意しました。

たくさんの意味で背中を押された気がします。
たくさんの場所で人々に届けられることを希望します。

映画「生きる」を見て

江上 剛（作家）

東日本大震災から１１年を経ても多くの人々の死に悲しみを禁じ得ない。その中でも大川小学校の子どもたちの死は特別である。この死に対してだけは、悲しみではなく激しい憤りや怒り、理不尽さなど、言葉では言い表せられない葛藤を覚えざるを得ない。それは子どもたちの死は津波という自然災害によるものではないからだ。彼らには津波から逃げる時間が十分にあった。そして生き残り、大人になり、災害で痛んだ故郷を復興させる力となり得たのである。彼らはなぜ死ななければならなかったのか。それは自然災害によるというやむを得ない死ではなく、もしかしたら殺されたのではないだろうか。それなら犯人がいるはずである。彼らの親たちは、子どもたちの理不尽な死の犯人を見つけようと立ち上がった。

映画「生きる」は、その戦いの記録である。親たちには、先生も亡くなっているんだぞ、津波だから仕方がないじゃないか、子どもの死を金に変えるのかなど心無い誹謗中傷が浴びせられる。それでも親たちは、それらを乗り越え、子どもを殺したのは誰かを追及する。その戦いは誠実さに溢れ、力強く、亡くなった子どもたちに寄り添うもので映画を観る者たちの心を震えさす。親たちは自分たちが子どもを助けられなかったという深い挫折感、喪失感で苦しんでいる。もし学校という子どもたちが最も安心して過ごすことのできる場所の運営を担っている人たちが、親たちとともに真実に向き合ってくれれば、裁判に訴えることもなかっただろう。しかし教育現場の人たちは、自己保身、嘘、隠蔽など、子どもたちの死に寄り添う気持ちなど一片もない。この姿は、私たちの既視感に重なる。森友学園事件で一人の公務員を自死に追い込んだ財務省の官僚や政治家の姿だ。日本のリーダーたちは、口を開けば、国民を守ると言う。学校関係者も同じだろう。しかし裁判の過程で浮かび上がるのは、子どもたち守る、国民を守る責任のある者たちの無能さ、無作為さ、無責任さなど「無」ばかりである。

大川小学校は、震災遺構となり、後世に津波の恐ろしさを伝える役目を担わされることになった。開所式に参加しなかった遺族もいる。その理由は、その遺構はこどもたちの死の真実を伝えていないからであると映画の中で語っている。大川小学校は、震災遺構ではなく、子どもたちを守る責任があった者たちの無責任などの「無」がどれほどの大きな悲しみを生み出すのかを伝える役割を担うべきなのだ。

大川小学校の亡くなった子どもたちは後世の教訓などになりたくはなかったし、なることもなかった。彼らの親たちは、裁判に勝った今も癒されない悲しみの中に沈んでいる。しかしそれでも親たちは、亡くなった子どもたちの励ます声や背中を押す手のぬくもりを感じながら「生きる」ために一歩を踏み出そうとしている。映画「生きる」は企業や行政など人々を守る責任のある人たちが観るべきであるとともに、理不尽な死で子どもたちを亡くした親たちが、「生きる」ために何をなすべきかを教えてくれるのではないだろうか。

ありがとう。私達の未来のために。思いが溢れ出し、大川小行きの電車に飛び乗った。

生きたかったみんなのかわりに、私達が未来を拓くから。

災害は止められないが、命は守れる。涙の後に確信が残った。

全教職員、全行政職員が悉皆で見るべき映画である

学校で命を落とすことがあってはならない。そのためには事前準備こそ

鈴木秀洋（日本大学危機管理学部）

大谷昭宏（ジャーナリスト）

２時間余りの映画の間、何度、「負うた子に教えられて」という諺を思い浮かべたことか。諺では、そのあとに「浅瀬を渡る」と続くのだが、大川小学校の子どもたちの親は違った。子どもたちは背負われた親の背中から足を取られそうな急流渦巻く深みばかりを指差すのだ。しんどいけど、石を払いのけ、足を踏ん張って、深みの底に目を凝らさないと、本当のことは見えて来ないよ、と。

親たちの耳には、子どもたちの「先生の言うことを聞いたのに!!」という叫びが、こだまする。

だが実際は行われていなかった避難訓練。廃棄された聞き取りメモ。いつの間にかねじ曲げられた「山の方に逃げよう」という子どもの証言。市教委に、県に、（文科省がお膳立てした）国に裏切られた親たちに背中の子どもが指差したのは、裁判という長く、しんどい道だった。

たった２人の弁護団。その裁判でさえ、１審は勝訴とはいえ現場の教師たちに責任をおっかぶせた通説判例。親たちを失望させるだけだった。

だけど、ついに深みの底にキラキラと光るものが見えてくる。２審仙台高裁が下した控訴審判決は、教育現場に責任を押しつけることなく、市、県、国の組織的過失によって子どもたちの命が奪われたと断罪。親たちにとって、まさに「胸に刺さる心ある判決」だった。上告審、最高裁もこれを支持、判決は確定した。

子どもたちの「先生の言うことを聞いたのに!!」の叫びに、裁判所が出した答えは「学校が子どもの命の最後の場所になってはならない」だった。この言葉が広く深く、永遠に根付いてほしい。

あらためて、悲しみのどん底から負うた子の指差す冷たい深みに足を踏み入れ、闘った親御さんに、たった２人の弁護団に、心から敬意を表したい。そして１人でも多くの方にこの映画を見てほしい。

語り部やオンラインの活動でお会いすると、笑顔で優しい言葉をかけてくれる大川小語り部の方々。本当は語り部にも、裁判を起こす人にもならなかったはずのお父さんお母さんが、自分のいのちより大切な子どもたちのために、なりふり構わず、懸命に頑張る姿がスクリーンにありました。活字にできない説明会の雰囲気、やりとり、裁判への心の経緯と、お父さんお母さんの本音、想いを知ることができます。プレスと東京、２回試写会に伺いました。涙にくれたあと清々しさも感じた初回、そして、座る位置も、視座も変わり新たな気づきがあった２回目。今、起きたこと、いのちを守ることを伝えながら新たなチャレンジもする皆さんがもっと好きになりました。３回観たい映画です。寺田監督、ありがとうございました。

黒田典子（オンライン防災　代表・宮城県仙台市）

峠淳次さん（フリーライター）

あの日、大川小学校で何があったのか。なぜ 74 人もの児童が犠牲にならなければならなかったのか。ドキュメンタリー映画「『生きる』～大川小学校津波裁判を闘った人たち～」は、その真実を求めてやまなかった遺族たちと、その代理人弁護士二人による闘争の記録である。

彼らの前に立ちはだかったのは、学校現場や教育行政の前線にある大人たちの、あまりに無責任な自己保身と事なかれ主義の体質だった。悲しみのどん底にある遺族たちを前に「（子どもが亡くなったのは）宿命だ」と言ってのける市長、生き残った児童からの聞き取り調査メモを廃棄・隠蔽していた市教育委員会、さらには遺族らの心を土足で踏み荒らすごときの一般市民からの無神経な誹謗中傷・・・。映像が浮き彫りにする彼ら大人たちの、無情、無慈悲にして傲慢、陰湿な態度に慄然とし、怒りがこみ上げる。

周知の通り、大川小津波訴訟自体は、国や県、市の「組織的過失と責任」を断罪して幕を閉じた。原告側の全面勝利である。だが、映画の終盤で遺族たちは語る。「一歩が終わったばかり」「これからだ」といった趣旨の言葉を。おそらくは、この映画の〝肝〟は遺族たちのこの言葉にこそあるのだろう。そう、大川小の〝事件〟が残した苦い教訓を、同時代に生きる私たち一人ひとりが次代へどう伝え、どう生かしていくか。あるべき学校の姿を、あるべき教育の理想を、命を守る社会をどう築いていくか。一方で東日本震災と大川小の記憶が風化しゆき、他方でいじめや子どもへの暴力・虐待などが絶えない今この時の日本社会にあって、映画「生きる」はそう私たちに問い掛けているに違いないのだ。

教員や行政関係者だけにとどまらず、すべての大人たちが観賞し、ここから勇躍の一歩を踏み出してほしい。そう願うとともに、私自身もそうありたいと心新たにしている。

主題歌「生きる」大川小学校津波裁判を闘った人たち

【駆けて来てよ】

１　もう一度だけでいいから　　思い切り抱きしめたい

あなたの笑顔を見ていたい　愛していると伝えたい

だから

帰っておいで　　戻ってきてよ

大空の果てから　駆けて来てよ

２　あなたの気配に振り返える　　誰もいないあなたもいない

何度も捜してみたけれど　　木漏れ陽だけが射している

だから

帰っておいで　　戻ってきてよ

いつもの笑顔で　駆けて来てよ

３　聞こえてくる　あなたの声は　泣いてる私を叱ってる

あなたの記憶を抱きしめて　　あなたとともに生きていく

だから

帰っておいで　　戻ってきてよ

両手を広げて　　駆けて来てよ

（繰り返し）帰っておいで　　戻ってきてよ

大空の果てから　駆けて来てよ

歌　廣瀬 奏　作詞・作曲　吉岡 和弘　編曲　日高 哲英　ミキシングエンジニア　山田正弘
主題歌プロデューサー　廣瀬　純　主題歌協力　SCSミュージカル研究所　斉藤　浩行

掲載記事一覧（監督調べ）

■河北新報　2021 年 11 月 7 日付
大川小津波訴訟　遺族の闘い、ドキュメンタリー映画に　CFで製作費募る

■共同通信　2021 年 11 月 21 日配信
大川小映画、支援に語り部で返礼　来春完成、製作費支援者に

■朝日新聞　2021 年 12 月 31 日付
旧大川小遺族、残した 200 時間超の動画　「溝」に衝撃受け映画制作

■共同通信　2022 年 2 月 19 日配信
大川小、津波裁判巡る映画　「生きたかった命」伝える

■河北新報　2022 年 2 月 20 日付
大川小遺族追った映画試写会　訴訟の経緯　丹念に描く

■読売新聞　2022 年 2 月 22 日付
大川小遺族の葛藤 映画に　仙台で試写会　東北で劇場上映を計画

■共同通信　2022 年 3 月 9 日配信
亡き友思いプロの舞台へ　かなわなかった翌日の共演　（主題歌・駆けて来てよ）

■産経新聞　2022 年 3 月 13 日付
「生きる意味考えて」　大川小訴訟、映画制作進む

■情報屋台（web）2022 年 3 月 19 日配信
映画『「生きる」～大川小学校　津波裁判を闘ったひとたち』を見る

■FRaU（web）2022 年4月24日配信
「約 1 分で避難できた」大川小 74 人の児童はなぜ校庭で待たされ津波に呑まれたのか

■日刊スポーツ　大谷昭宏コラム「フラッシュアップ」　2022 年 4 月 25 日付
学校が子供の命の最後の場所になってはならない

放送＆ドキュメンタリー
■BS 朝日「日曜スクープ」　2022 年 3 月 13 日放送
大川小津波裁判“日本のこれから”

■ヤフージャパン　クリエータズプログラム　2021 年 3 月 6 日配信
「大川小学校」の訴訟に挑んだ 2 人の弁護士――判決後も原告遺族と向き合う理由

裁判官はこう言った

『学校が子どもの命の最期の場所に なってはならない』

2011年3月11日　午後2時46分
東北地方太平洋沖を震源とする
マグニチュード９の巨大地震が日本列島を襲った

東日本沿岸部の数多くの学校が被災した
しかし 74人の児童と10人の教職員が津波に呑まれ
命を失った（児童4人はいまだに行方不明）のは
宮城県石巻市にある大川小学校だけだった

地震発生から津波到達まで約51分
ラジオや行政の防災無線で情報は学校側にも伝わり
スクールバスも待機していた

なぜ我が子は学校で最期を迎えたのか
この映画はその答えを探し続けている
親たちの記録である

遺族が10年間にわたり撮影し続けてきた
「200時間」を超える記録が映画に